JICA／ハンガー・プロジェクト共催セミナー

飢餓終結への道

―グローバル・パートナーシップを求めて―

平成4年10月5日

国際協力事業団
国際協力総合研修所

JICA
000
87.3
LIC
LIBRARY

総 研
J R
92－103

JICA LIBRARY
1109727[6]

国際協力事業団
25672

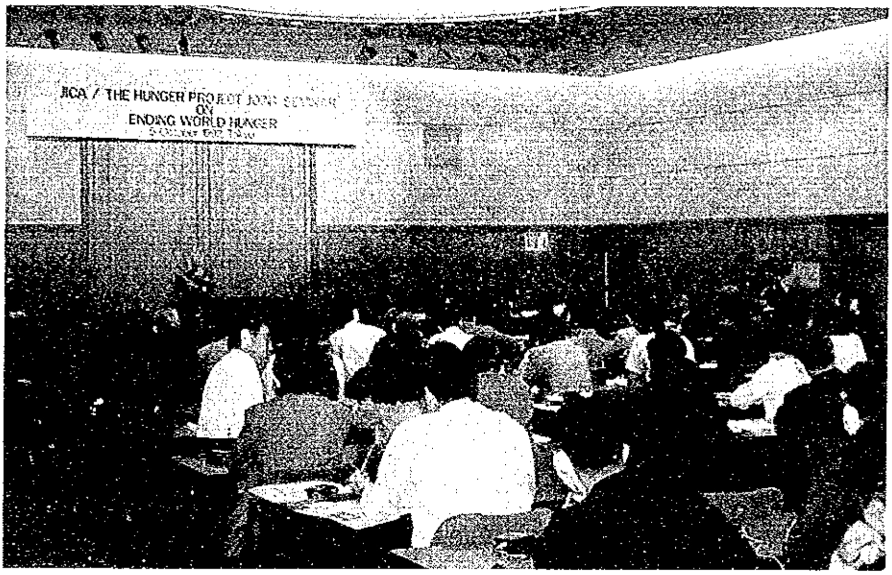
飢餓終結への道

――グローバル・パートナーシップを求めて――

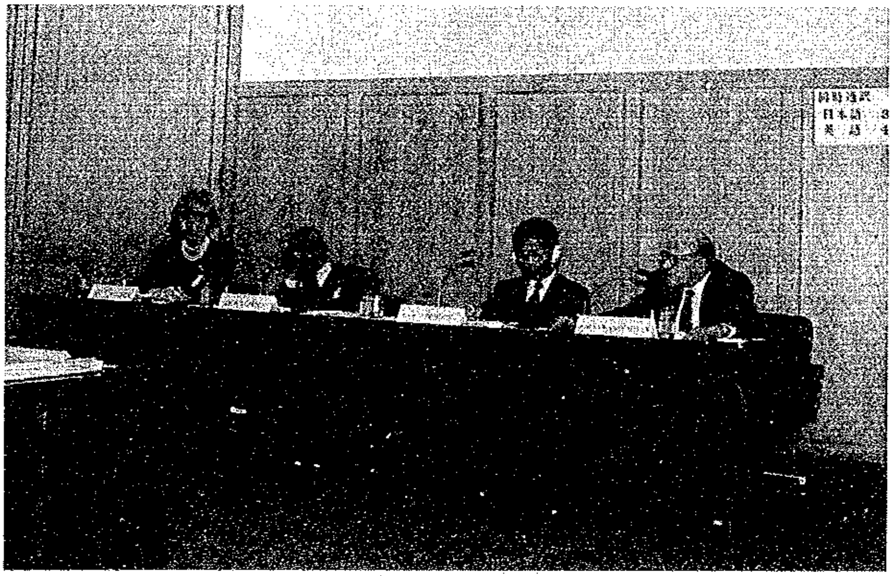
JICA

JICA / ハンガー・プロジェクト共催セミナー

飢餓終結への道



セミナー全景



ホームズ理事長　　タデッセ部長　　友松助教授　　スワミナーサン理事

はじめに

この地球上では、現在でも毎日3万5000人にのぼる人々が飢えのために命を失い、その内の4分の3は子供だといわれています。その原因としては、突発的な自然災害、紛争などによるものは全体の1割程度で、残る9割は慢性的な飢え、つまるところ貧困に起因すると考えられています。

我が国は、海外で発生した大規模な災害に対しては、食料援助、国際緊急援助隊の派遣などを実施しており、一方、貧困問題に対しては1970年代後半より基礎生活分野に対する協力の拡充・強化に務めてきました。特に1989年には、現難民高等弁務官緒方貞子氏を座長として当国際協力総合研修所に「貧困問題援助研究会」を設置し、貧困対策援助のあり方について検討して参りました。以後、同研究会の提言を受け、貧困対策援助が一層強化されつつあるところです。

飢餓・貧困問題は、政治や環境などとも密接に関連しており極めて解決の難しい問題で、従ってこれが解決のためには総合的取り組みが必要であり、飢餓・貧困問題に取り組む機関の貴重な経験・知見の共有と関係者の連携・協力が不可欠と考えられています。「ハンガー・プロジェクト」は、ニューヨークに本部をおき、1977年の設立以来一貫して、しかも世界的な規模で、この飢餓問題に取り組んできているNGOで、貴重な経験の蓄積があります。

そこで、国際協力事業団は、ハンガー・プロジェクトと共催で「飢餓終結への道－グローバル・パートナーシップを求めて」と題するセミナーを、平成4年10月5日開催いたしました。本セミナーは100名を超す参加者を得て、我が国及びハンガー・プロジェクトからの飢餓・貧困対策援助についての経験・知見の報告と活発な質疑応答が行われました。

ここに、本セミナーの報告書を取り纏めましたので、今後の飢餓・貧困対策援助に向け関係各位にご活用いただければ幸いに存じます。

平成4年12月

国際協力事業団
国際協力総合研修所
所長　河西　明

目　　次

はじめに

開 会 式……1
　開会挨拶　眞木秀郎　国際協力事業団 副総裁……3
　祝　　辞　桜内義雄　衆議院議長……5

講　　演……7
　I．世界の飢餓終結：ハンガー・プロジェクトの戦略的アプローチ……8
　　ジョーン・ホームズ
　　ハンガー・プロジェクト世界理事長

　II．アフリカにおけるハンガー・プロジェクトの事業……21
　　フィティグ・タデッセ
　　ハンガー・プロジェクト・アフリカ部長

　　質疑応答……28

　III．開発途上国における食糧生産の向上について……31
　　友松篤信
　　宇都宮大学農学部助教授

　　質疑応答……34

　IV．永続的栄養保障の達成：非凡なる機会……37
　　M.S.スワミナーサン
　　ハンガー・プロジェクト世界理事

　　質疑応答……43

資　　料……47
　資料1:セミナー・プログラム
　資料2:講師略歴

開 会 式

開会挨拶

国際協力事業団　副総裁
眞木秀郎

本日は皆様ご多忙のなか、このハンガー・プロジェクトと私ども国際協力事業団が共同で企画いたしましたこのセミナーにご参加いただきまして、誠にありがとうございます。また特に本日は、このハンガー・プロジェクトの事業、更にはまた、青年海外協力隊とJICAの仕事に日頃からたいへんご理解とご支援をいただいております衆議院議長の桜内先生のご来臨を得まして、われわれ、たいへん光栄に存じております。誠にありがとうございました。

さて、この地球の上では毎日3万5000人にものぼる人びとがどこかで飢えが原因ということで亡くなり、またその75%、4分の3を子供が占めておるという報告がございます。これはたいへんなことでございます。

飢えということには洪水とか旱魃といったような一時的な原因によるものと、それから慢性的な飢餓というものがございます。死亡原因の9割が慢性的な飢餓によるといわれておりまして、この基本的な原因は栄養不良、食糧不足等々、帰するところはやはり貧困のためであろうと思います。

1985年には世界中で11億人以上の人びと、つまり途上国に住む住民のほぼ3分の1が絶対的貧困といったような状況にございまして、これが2000年になっても、いまだ8億以上の人びと、途上国人口の約2割近くが絶対的貧困の状態におかれるというのが1990年の世界銀行の報告が予測しておるところでございます。また、これも世界の経済状況が良好に進展した場合ということでございまして、われわれが手をこまねいていたのでは状況はさらに悪化するということでございましょう。

また、この貧困の問題は人口とか環境、あるいは教育の問題とも非常に密接に関連をした複雑な問題であることは皆様よくご承知のとおりでございます。途上国の人たち自身も努力しなければならないわけでございますが、われわれ先進国の人間もできるかぎり、これに協力をしていかなければならないと考えております。

この中で、飢えや貧困の被害をもっとも受けやすいのが乳幼児でございます。1才以下の子供さんの1000人当たりの死亡率、乳児死亡率をみますと、日本は現在4.8ということになっていますが、これが50以上の国ぐには世界で80ヶ国以上にものぼるわけであります。多少、意外と思われるかもしれませんけれども、日本のこの乳児死亡率が50よりも低くなったというのは、1955年(昭和30年)の

ことで、まだ比較的最近のことでございます。

きょう、われわれと一緒にセミナーを催しますハンガー・プロジェクトは2000年までに地球上から飢餓を終わらせること、より具体的に申しますと、乳児死亡率が50以上の国ぐにをなくすことを目標に1977年に設立されましたNGOでございます。現在、世界的なネットワークで積極的な活動をされております。

本日はホームズ世界理事長初め、タデッセ、グローバル・オフィス・アフリカ部長、それから有名な学者でございますスワミナーサン世界理事の各氏から、飢餓を終わらせるための取り組み等についてお話をいただくことになっておりまして、貴重なご経験をお聞かせいただけるものと期待をいたしております。

また、わが国の方からは宇都宮大学の友松先生からも、長くJICAの専門家あるいは国際協力専門員としてご活躍をされましたご経験を活かしまして、飢えの問題にどう取り組んでいくべきか、お話をしていただくことになっております。

国際協力事業団(JICA)におきましては、平成2年に、現在国連難民高等弁務官をされております緒方貞子先生に座長をお願いいたしまして、貧困問題に関する援助研究会を設置いたしました。途上国におけます貧困対策援助のあり方等を検討したところでございます。このセミナーが飢え、貧困の問題について、われわれの理解を一層深める有意義な機会になることを期待しておるわけでございます。

以上、簡単ではございますが、開会に先立ちまして、JICAを代表してご挨拶に代えさせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

祝　　辞

衆議院議長
桜内義雄

本日は、ただいまのJICA副総裁のご挨拶のように、ハンガー・プロジェクトとJICAの共催でたいへん有益なセミナーが開かれること、心から敬意を表したいと思います。

本日、さきほどご紹介がありましたように、飢餓の問題に取り組んでおられるお4方の権威ある方がたのお話を承るわけでありますが、とくにハンガー・プロジェクトの世界理事長のジョーン・ホームズさんがここにお見えでおられます。たいへん熱心にこの問題に取り組んでおられるわけで、そのご経験に基づくお話もあられるということで、今日お出かけの皆様方、大勢とは申しませんけれども、この問題にご関心をもち、お話を聞かれるということは、ほんとうに時宜を得たものだと思います。飢餓の現状、あるいはこれにどう対応していくか、またアフリカやインドに多くの飢餓に直面しておられる方がたがおられるわけで、それらのことについてもお話があることと存じます。

私はこのセミナーの「飢餓終結への道」というキャッチフレーズが掲げられておりますが、かねてより、ジョーン・ホームズさんが21世紀までには飢餓をなくそうという意気込みをもっておられるわけで、これをぜひ実現するために日本の私どもはもとよりでありますが、国際的に大きく輪を広げて努力をする必要があると痛感するものでございます。そういう飢餓をなくそうという時に、いまの世界の現状では残念ながら民族紛争、地域紛争、あるいは宗教紛争などで夥しい難民を生じ、そしてその難民の中でだいじなお子さんたちがほんとうにたくさん、悲惨なほど亡くなっていかれるというようなことも目のあたりにするわけでございまして、そういうことを考えていきますと、このたびのこのセミナーによって、さらに飢餓の問題に私どもが理解を深めて、そして飢餓に直面しておる方がた、それらの方がたも自助努力をすると──ジョーン・ホームズさんに、ただ救済というのではいけない、みんなが努力して、どうやって食糧を生産し、確保するか、そういうことをしていかなければいけないということを聞いたことがございます。まさにそのとおりで、そうでなければ、いつまでたってもこの問題の解決には実際上進んでいかないのではないかと、こんな気がしておるところでございます。

本日のこのセミナーが実り多いことをご期待申し上げ、皆様方のさらにこの重要な問題についてのご活躍をお祈りをいたしまして、ご挨拶を終わります。あ

りがとうございました。

講　　演

Ⅰ．世界の飢餓終結：ハンガー•プロジェクトの戦略的アプローチ

ジョーン・ホームズ
ハンガー・プロジェクト世界理事長

本日のセミナー、「飢餓終結への道──グローバル•パートナーシップを求めて」はJICAとハンガー•プロジェクトの共催です。

このセミナーの目的は、共通理解の礎を確立することです。この共通理解によって、飢餓終結という世界的取り組みにおける、JICAとハンガー•プロジェクトの将来の協力が可能となるでしょう。

本日のセミナーは、非常に危機的な時期、つまり地政学的激変、転換、動乱の時期に開催されているように思います。冷戦後、世界はここ50年で最も深刻な不景気を迎えています。世界は、何百万という人々が飢餓の危機に陥っているソマリアなどの、民族紛争を解決する方法を模索しています。歴史が今もなお、我々に教えてくれるのは、最も重要な突破口や革新がなされるのはしばしば逆境の時代であるということです。

そのような一つの突破口となるのは、世界的問題を解決する上で国際的協力を行うという、前例のない新しい世界規模の取り組みです。この取り組みの目覚ましい2つの例として、歴史的な1990年の「世界子供サミット」と、最近リオデジャネイロで行われた国連の「環境•開発会議」があげられます。

この挑戦と好機の時期を迎え、世界はますます日本にリーダーシップを求めています。世界は日本が成し遂げた経済的奇跡を見て来ました。日本が国民の資質に投資することによって成し遂げてきた、人間の奇跡を見て来たのです。

このセミナーの目的の中で、また歴史的に重要なこの時期を認識する上で、皆様にハンガー•プロジェクトやその任務、そして世界の飢餓終結に挑むための我々の戦略について、よく理解して頂くことは、私の喜びであります。

ハンガー•プロジェクトについて

ハンガー•プロジェクトは、21世紀に向けて世界の飢餓終結に取り組んでいる、国際的な非営利団体です。

1977年に創設されました。その時以来、世界152カ国から600万人以上の人々が、このハンガー•プロジェクトに参加することによって、飢餓終結への個人的

決意を表明して来ました。

ハンガー・プロジェクトの活動は、世界理事会の指導の下、世界中のスタッフやボランティアのネットワークによって行われています。この世界的なハンガー・プロジェクトの本部は、ニューヨーク・シティにあります。

ハンガー・プロジェクトの資金は主として、世界中の個人から寄付されたものです。数千人の個人が定期的に、毎月献金を行っています。また、益々多くの企業や公共団体が、ハンガー・プロジェクトに貢献しています。

ハンガー・プロジェクトは、多くの非政府組織連合の一員となっており、国連及びその関係機関との緊密なパートナーシップの中で活動しておりまして、国連の経済社会理事会に登録されています。

飢餓に関する事実

ハンガー・プロジェクトは、慢性的で、永続する飢餓の問題を提起するために設立されました。飢餓は人間にとって、致命的となる最古の敵です。次に、飢餓の事実関係を少し振り返ってみます。

－世界で約10億人の人々が、絶対的な貧困状態にあります。ロバート・マクナマラ氏はこれを、「道理にかなったいかなる定義においても、人間としての品位・体裁以下の生活状態」と呼んでいます。
－8億8千万人の大人が読み書きができません。
－鉄分の欠乏による貧血症に苦しむ人は、5億人にのぼります。
－安全な飲料水に恵まれない人は、17億人もいます。
－価格にしてほんの数セントの錠剤で助かるかもしれないのに、毎年、ビタミンAの欠乏により、20万人の子供が失明しています。
－推定1300万人から1800万人の人々が毎年、餓死しているとされています。
一日に3万5000人が死亡していることになります。
毎分24人が死亡し、その4分の3が5歳以下の子供達です。

飢餓ほど無残な災害は他にはありません。第一次大戦と第二次大戦での死者を合計した数を上回る人々が、過去3年間に餓死しています。死亡した子供の数は、260名の子供を乗せたジャンボ旅客機100機が、毎日墜落して死亡する数に相当します。

戦略組織としてのハンガー・プロジェクト

ハンガー・プロジェクトは、村落及び政策レベルで、また先進国及び開発途上国において、学生や政府と国際機関の指導者たちの参加の下、飢餓の終結への取り組みに深く関与しています。

ハンガー・プロジェクトは月並みな救済機関でもなければ、開発機関でもありません。むしろ、『戦略的な』組織として、新しいやり方で活動するよう計画されたプロジェクトです。組織論専門家のデヴィッド・コーテンは次のように書いています。

「戦略的組織というのは、既存もしくは予期し得る機会にただ反応する以上のことを見通すことができます。それはまた、さもなければ得られなかったであろう新しい機会を作り出します。すなわちその組織自体の将来を創造することに従事します」

ハンガー・プロジェクトの使命、つまりそれが戦略的に意図しているのは、2000年までに世界の飢餓を終結させることです。

世界がこの目標に達したと判断する尺度は、すべての国々の乳児死亡率が50以下になった時とします。

ご承知のように、日本は乳児死亡率が4.6で、世界でも最低水準とされています。それに比べて、インドの乳児死亡率は91であり、エチオピアでは139です。

私達の事業には、特別な焦点があります。私達は、問題の科学的もしくは技術的要素には焦点を絞りません。ハンガー・プロジェクトが実際に焦点とするのは、飢餓終結に関する「人的要素」です。これは専門家または技術者の教育や訓練に適用される、人的資源開発を意味するわけではありません。むしろ、ハンガー・プロジェクトは、個人が自分たちの創造性や有効性を表現できる環境を作り出せるよう、取り組んでいます。私達はコミュニケーションや問題解決における個人の間の相互関係に生ずる原動力に働きかけます。私達は、一致協力した行動を成功させるのに必要な、ビジョン、合意、動員、協力を引き出そうと、努力しています。

私達は、飢餓終結に挑むための解決策を作り出すために、リーダーシップを強化し、社会のあらゆる部門から人を集めるよう、働きかけています。

私達が自分達に託した使命は、飢餓終結のために「何が足りないか」という問を発することです。それから、足りないものを提供し、またはその提供を保証するために、計画を立てるのです。

何が足りないかを確認するために、飢えている家族のおかれている立場を見

ていこうと思います。つまり、彼らが飢餓に陥るのは、何が足りないからなのでしょうか?足りないものを提供するためには、私達は地球に住む者として、世界の相互依存社会の全体を考慮にいれる立場を守ります。

私達は「何が足りないか」という問いかけを行う決意をしています。それは、我々の活動自体のためだけではなく、その問を飢餓終結の過程全体に染み込ませ、それが飢餓を終わらせる過程における重要な部分であると理解させるためなのです。

ハンガー・プロジェクトの歴史

何が不足しているのかを見極め、それを提供するための戦略的アプローチの結果として、ハンガー・プロジェクトは、その発展の様々な段階で、様々な計画を導入して来ました。したがって、年代を追ってハンガー・プロジェクトを説明することは理にかなっています。戦略的組織の中で、作業がいかに展開されてきたかが、分かります。

1977年

私達はハンガー・プロジェクトを始め、飢餓問題を研究したとき、次のような観察を行いました。

1. 「飢餓の永続性」という問題は、広範にわたる社会的経済的開発問題にカモフラージュされ、目に見えませんでした。
2. 少数の専門家を除いて、人々は飢餓の終結はありえないし、その永続性は避けられないものと考えていました。
3. 国際社会また社会一般において、飢餓と闘う作業は、飢餓の苦悩を引き起こす根本を永久に解決することよりも、その苦悩を和らげることに焦点が当てられていました。
4. 一般の人々は、飢餓は避けられないものと認識し、諦めの境地だったので、可能性ある解決法への意義ある参加からは除外されていました。

同時に、ハンガー・プロジェクトは独自の分析を行い、全米科学アカデミー、ブラント委員会及び世界の飢餓に関するアメリカ大統領委員会など、多くの画期的な委員会の研究と同様の結論に達しました。これらの研究は全て、飢餓は不可避なことではないとの結論を出しました。欠けていたのは、飢餓を終結させようという、人間の意志と決意だったのです。

ハンガー・プロジェクトは、何が足りないのかを提起する戦略を編み出しました。次にあげる3つの主な目的を達成するために、私達はコミュニケーション、

情報、登録を柱とした大がかりなキャンペーンを行いました。

1. 一般大衆の飢餓に対する考え方を、「飢餓は不可避である」から「飢餓終結は可能である」という考え方に変えること。
2. 飢餓終結に向けて、世界規模の決意を生み出すこと。
3. 問題解決のために、支持基盤を構築すること。

私達は何千というボランティアの人々を訓練し、次のような簡潔なメッセージと共に、学校、教会、街角、職場に送り込みました。

－飢餓は存在する。毎日、3万5000人が飢え死にしている。
－飢餓は存在する必要のないものであり、終結できる。
－あなたも私も個人として、差異を生むことができる。

1980年2月までには、100万人の人々がハンガー・プロジェクトに参加し、飢餓終結への個人的決意を宣言したカードにサインしたり、自分達の決意と一致した行動をとると表明したりしました。

このキャンペーンの結果、飢餓終結は公共の場において、またポピュラー・カルチャーとして、はっきりとした目に見える問題となりました。飢餓終結の背後には今や、その決意を声と行動で表明する、支持者がいます。

1981年

私達の計画が進み、支持者が増えるにつれて、まさにこの取り組みにより、次に足りないのは何かが分かりました。この新しい決意に燃えた支持者は、飢餓終結の過程において力強い仲間になるために必要な、教育と情報に乏しいことが分かったのです。

ハンガー・プロジェクトは、今足りないものを提供するために、新しい戦略を練りました。私達は公共教育プログラムを始めました。これは「開発教育」として知られるようになったプログラムの先駆けでした。

私達は公共教育プログラムを通して、次のような飢餓に関する基本的事実について、正確な情報を提供しました。

飢餓とは何か。飢餓はどのように計るのか。
飢餓に瀕している人の数は何人か。
そのような人々は何処に住んでいるのか。
誰が飢えているのか。
飢餓を終わらせるために、どんな解決策があるのか。

私達は、人々の飢餓問題及び飢餓に苦しむ人達との関係を転換するというやり方で教育しました。

問題は、飢餓に瀕する人々についての情報が欠如しているということだけではありませんでした。問題なのは、既存の情報が、飢餓終結に逆効果となる、固定観念を作り出したということです。飢えている人々は、無力な犠牲者として描かれました。のちに「貧困のポルノ版」として知られるようになったこの描写は、飢えた人々を卑しめ、飢えていない我に罪の意識を抱かせる結果となりました。心に描かれたこのイメージによって、飢餓終結に対する効果的な反応が得られなくなりました。

その代わりとなるハンガー・プロジェクトのアプローチとは、飢えた人々は勤勉であり、尊厳もあり、まさに私達と同様、将来を夢見て自分の子供達のために、より良い生活ができるように働く人々なのだということを、一般の人々に知らせることでした。この方法で、私達は古いイメージを、罪の意識や「救済者」になりたいという願望を引き起こしたイメージから、尊敬の気持ちや決意した「パートナー」になりたいという願望を抱かせるイメージに変えたのです。

こういった種類の教育を提供するために、私達が計画したいくつかのプログラムでは、下記のようなことを行いました。

- 飢餓終結を学校のカリキュラムに編入するために、数千人の教師を訓練する、現職者教育。
- 「飢餓終結に関する説明会」として知られ、4時間にわたって9カ国語で行われた講習会。19カ国から75万人以上の参加者がありました。
- 「飢餓終結:待望のアイディア」と題する、限定参考書の作成及び発行。これは、8万部以上売れました。
- 飢饉と、永続性のある慢性の飢餓との違いを明らかにするための、11分の教育ビデオ。
  このビデオは15ケ国語で作られ、3億2000万人以上の人々が見ています。

これらのプログラムに参加した個人は、それぞれの決意を次のような多くの方法で表しました。

- 私達のメッセージを広め、学んだことを共有する。
- 効果的な政策とプログラムの擁護者となる。
- ハンガー・プロジェクトだけではなく、飢餓終結に取り組んでいる、何百という組織に対して、財政的支援を行う。

－独自の組織をつくる。その多くは今も存続しています。

この教育キャンペーンで現れた最も劇的な結果は、「飢餓を終わらせる若者」という学生運動でした。これはその広がり、インパクトからいっても、グローバルな運動となりました。今日、69カ国において、約2万5000人の若者が「飢餓を終わらせる若者」運動に参加しています。

1980年代半ばまでには、ハンガー・プロジェクトや他のいくつかの組織がパイオニアとなった開発教育は、救済・開発組織の仕事の中で欠かせない部分となりました。多くの政府や非政府組織は今、この努力に多大な資力をそそいでいます。

1983年

私達の動員・教育プログラムは、先進諸国では持続、発展したので、私達としては今度は、飢餓が存在する国に注目するようにになりました。

私達は戦略上、飢えに苦しむ人が最も多い国、インドでプロジェクトを始めることにしました。

1983年、私達はインドでのハンガー・プロジェクトに着手し、それをインドの人々が手掛け、指導する国民的組織に仕立てあげました。

インド・ハンガー・プロジェクトの指導部が発見したことは、インドの人々が持続する飢餓に日々接して生活している一方で、その問題の真実に関しては無知がはびこっていることでした。インドの人々は、飢餓の持続は避けられないと考えていましたし、世間では諦めムードが色濃かったのです。この状態に着手し、転換するために、あるプロジェクトが計画されました。

－インド・ハンガー・プロジェクトは、仕方ないとか避けられないとかいう意識を、飢餓は終わらせるべしという決意に変換させるキャンペーンを計画、着手しました。100万人以上のインド国民が飢餓終結に身を捧げ、この運動に参加しました。
－インド・ハンガー・プロジェクトは、特別に計画された動員・訓練プログラム、「決意と行動の研究会」を実施しました。この研究会で、全国から集まった人々は、飢餓の事実について学び、飢餓撲滅を主張し、スラム街や地方の村での行動計画に乗り出しました。

この「意志と行動の研究会」に参加したある人は、大変感激して、グジャラト州の人口160人の村で、飢餓を終結させようと計画された、参加型開発のプロ

ジェクトに着手し、大成功を収めました。

1984年

ハンガー•プロジェクトがインドで定着したということで、私達は目をアフリカに移しました。アフリカはインドよりも飢えている人々の数が少ないのですが、アフリカの飢餓は世界で最も悲惨なのです。

思い出されることと思いますが、1984年から1986年まで、アフリカは干ばつと飢饉のため荒廃しました。この危機に対して、史上最大規模の人道援助が行われ、歴史的な「ライブ•エイド•コンサート」で頂点に達しました。ハンガー•プロジェクトは、決意の大掛かりな動員に参加できる栄誉を与えられたのです。同時に、私達は、飢餓の危機の根本的原因となっている問題を提起することに、一層重きを置きました。私達が確認した3つの主な問題は次の通りです。

1. リーダーシップ:アフリカの危機の一部は、リーダーシップの危機にあることが分かりました。アフリカのリーダーシップは優先順位を整理し直し、新しい政策を立て、アフリカを飢餓から解放するのに必要とされる、厳しい決定を行わなければならないとの認識に至りました。
2. 食糧生産:アフリカの食糧生産の減少は、農業部門を数年来軽視してきたためであり、結果として、アフリカの農業は非常に低い水準であることが、判明しました。
3. 国際的なパートナーシップ:先進国が寛大にアフリカの危機に反応していた一方で、アフリカが「絶望的なケース」として、先進国が「救済者」として描かれる限りは、アフリカの長期的な発展のために、本物のパートナーシップが結ばれることはないのは明らかであると、認識しました。

その後数年して、ハンガー•プロジェクトは、下記のような問題を提起するために、戦略的なイニシアティブを取るに至りました。

- リーダーシップの問題に取り組むために、永続的な飢餓終結に向けて発揮されたリーダーシップに対してアフリカ賞を設けました。これはただリーダーシップに感謝するというだけでなく、彼らを奮い立たそうという賞です。この賞はアフリカのノーベル賞といわれるまでの地位と影響力をもつに至ったと言う人もいます。
- 食糧生産の問題に対処するために、ハンガー•プロジェクトは、アフリカン•ファーマー•マガジンという雑誌を作りました。この雑誌は、アフリカの農業生産者の地位の向上を目指して、また、アフリカの政策決定者がアフリカの将来を握る存在として農民の能力を向上できるよう、彼ら

の考え方を形成するため、特別に企画されています。

1987年

私達の事業の最新局面は、1987年に見い出したものです。私達は長年にわたって、戦略的計画の規律が、飢餓終結事業にとって適切であるか、またどうやったら適切なものになるのかを、研究しました。

1987年から1989年まで、私達は100名以上の専門家と、戦略的計画及び国際開発の規律について話し合いました。

飢餓終結には計画が重要だということで、人々の意見は一致していましたが、型通りの計画、特に綿密に統制された、中央集権的な計画は、到達すべき目標には逆効果であるように思われました。新しくて、ダイナミックで、行動優先の戦略的アプローチが開発されたなら、それこそがまさに、開発過程そのものを具体化し、活気づけることができるはずだという考えで、専門家たちは一致しました。

従って、ハンガー•プロジェクトは新しい、ダイナミックなアプローチの創造に着手しました。私達はこのアプローチを「戦略的行動計画」と呼んでいます。これは社会のあらゆる部門の人々を力づけて、必要な突破口を開き、飢餓終結に足る持続的な勢いをつけるため、彼らが協力できるように企画されています。

この新しいアプローチは2カ国で始められました。1990年11月、インド計画委員会の招請により、ハンガー•プロジェクトはその「戦略的行動計画」(SPIA)としての初会合を開きました。1991年5月には、アブデュ•デューフ大統領の招請のもと、セネガルでSPIAを始めました。

SPIAは、最近国際的焦点となっている人間中心の開発を利用しています。それには経営科学における突破口が含まれています。それによって政府の力、NGOの企業家的創造性、ビジネス部門の生産性と『なせば成る』という精神、アカデミズムの有する原則などがもつ、最もよい面が結合されるわけです。

戦略的行動計画は、次は何が足りないのかを見つけ出し、それを整える独自の戦略に着手するためのフォーラムや方法論を、開発途上国の人々に提供します。

このアプローチには、異なる文化や指導体制をもった様々な国や州において反復され得ることが証明されつつあります。

1992年

1992年10月5日の今日に至り、飢餓終結のための一般的コンセンサスは、ハンガー•プロジェクトが始まった1977年に比べると、大きく変わっています。

1977年には飢餓の持続は避けられないと思われていましたが、1992年の今では、飢餓は終結できるものと世界は確信しています。また、飢餓は必ず終わらせるという決意の支持者たちが世界中におり、その終結のためにやらなければならないことについての、コンセンサス、つまり意見の一致が広く存在しています。

飢餓終結のためにやらなければならないことについての、この新たなるコンセンサスについて、少しばかり検討してみたいと思います。このコンセンサスはその本質において、開発過程の中心は人間であることの再確認を反映しています。そのコンセンサスによって明らかなのは、開発とは根本的に、個人の創造性、生産性、責任を十分表現するために、彼らの能力を向上させる過程であるべきだということです。これは将来、人々に対する認識を、開発の受益者から開発の担い手に変えるべきだと主張しています。

この新しい、人間中心のコンセンサスは次の事柄に反映されています。

－保健や生産性に対する投資の強調。
－複数政党制民主主義への劇的な移行。
－一般大衆の開発への参加が絶対的に重要であるとの認識。
－地域NGOの有効性の増大。
－小規模農民の能力向上に対する再度のコミットメント。

この新しい、人間中心のコンセンサスの最重要局面の一つは、女性が飢餓終結の鍵を握っているということです。

女性は地球上で最も、十分に利用されていない人材です。女性はきつい手仕事には貢献していますが、自分たちの知識、創造性、知能の面での貢献は、いまだに拒まれています。調査によると、飢餓終結のために、最もてこ入れしなければならないのは、女性の読み書きの能力です。

その他、飢餓終結のためのグローバル・パートナーシップにとって、特別に重要な局面が2つあります。

1. 飢餓終結は環境保全に複雑に関連しているという認識。
2. 資源の有効利用は、開発の鍵を握る関係者間の調整において、突破口を要するという認識。

戦略上の目標

この新しいコンセンサスと、不足しているものを提供するという使命を与えられて、ハンガー•プロジェクトは現在、戦略上の目標を4つに絞って事業を行っています。

1. 戦略的行動計画

私達は「戦略的行動計画」(SPIA)によるアプローチが、開発途上国の人々、組織、公共団体に行き渡るようにするつもりです。

2. アフリカの重要部門の強化

ハンガー•プロジェクトは引き続き、アフリカのサハラ砂漠以南の地域に焦点を絞って行動していきます。

ハンガー•プロジェクトはただ今私が説明した2つのプログラムを実行していきます。

－永続的な飢餓終結に向けられたリーダーシップを顕賞する、アフリカ賞
－アフリカン•ファーマー•マガジン

また、新しいプログラムも適宜追加していきます。

3. 教育／能力向上／唱道

私達の戦略上の第3の目的は、人々が地球市民となるよう、また飢餓終結を成し遂げるために行うべき行動のスポークスマンとなり、唱道するようになるよう、彼らを教育し、能力を向上させることです。

これの最も目覚ましい方法は今日、“青年飢餓終結運動”を通して浮かび上がって来ました。その運動は飢餓終結という問題を、公衆の目によく触れるところに掲げ、政治的議題の最優先に保つことに努めています。日本ハンガー•プロジェクトは、この世界的な若者の運動に指導力を発揮しています。

4. 世界的な繋がり：飢餓終結のための「共同戦線」の樹立

これは私達の戦略上の最新目的です。

私達の事業の多くが焦点に絞っているのは、飢えた人々の能力を向上させ、彼らに健康的で生産的な生活を送るチャンスを与えるような、政策を開発途上国

において呼び起こすことです。

これは外界から隔絶された状態ではできないということに、私達は気づいています。ワシントン、パリ、東京での決断は、飢えた人々が自立、自給の生活を築く能力に、著しい影響を与えました。ハンガー・プロジェクトは、飢えに苦しむ人々の能力を向上させることの重要性が、国際的政策決定の最前線に保たれるよう決意しています。ハンガー・プロジェクトはまた、こういった決断を下している組織と公共団体が「飢餓終結のための共同戦線」として、協調できるように取り組んでいます。

これは、リオデジャネイロでの地球サミットにおける私達の目的でした。また、このセミナーでJICAとのパートナーを組む上での目的でもあることは明らかです。

最近、私達は日本大使館の情報文化センターと国際交流基金と共に、ワシントンで開かれたシンポジウムの共同スポンサーを務める栄誉にあずかりました。このシンポジウムの主題は「世界の飢餓終結のための、日米のパートナーシップ」でした。このシンポジウムの開会にあたり、元外務大臣の大来佐武郎先生と、アメリカ上院外交委員会のクレイボン・ペル会長にご挨拶を賜り、光栄の極みでありました。

日米政府高官の方々、国連機関、政策研究所の方々にも、お話し頂きました。彼らは、現在の政治的風潮にそのようなパートナーシップを築く上での、障害の多くを分析しましたが、日米のパートナーシップとリーダーシップが飢餓終結に決定的な影響を与えるだろうとの意見で、それぞれが一致しました。

多くの具体的な提案がなされました。そのうちの一つは既に、日本の国会と飢餓に関する米下院特別委員会が協力できるよう、米国会議員、ベン・ギルマン氏によって、積極的に進められています。

このシンポジウムの議事録は現在、出版に向けて編集されており、東京とワシントンで目下行われている重要な政治的対話にとって、貴重な貢献となるはずです。

結論

最後になりましたが、ハンガー・プロジェクトの概略についての話をご清聴頂きまして、ありがとうございました。戦略的組織としての性質、その歴史的発展、飢餓終結のために「不足しているもの」の提供を保証しようとする、現在の戦略的目標を見直してみたわけです。

明らかに、飢餓終結にはまだまだ足りないものが、たくさんあります。しか

し、グロールなパートナーシップ、ダイナミックな戦略、資源の効率配分によって、実際に飢餓は終わらせることができるのです。

飢餓終結に一層貢献するために、ハンガー・プロジェクトは、JICAとパートナーを組んで事業を進める名誉にあずかれるものと思います。私達の4つの戦略的目標のひとつひとつには、JICAとハンガー・プロジェクト間の協力を具体的に展開できる機会があり、相互の協力は飢餓終結に大いに貢献できるはずです。

私個人としては、この概説をお話しする特別の機会を与えられ感動しています。ハンガー・プロジェクトに携わる者全員、私達の仕事について知ろうと、今回皆さんが時間を割いて下さったことを光栄に思っています。

II．アフリカにおける
ハンガー・プロジェクトの事業

フィティグ・タデッセ
ハンガー・プロジェクト・アフリカ部長

はじめに

紳士淑女の皆さん、本日、飢餓終結という最も緊急なトピックについてお話しできますことは、私にとって喜びであり、名誉なことです。私達が暮らしている相互依存の世界では、私達皆にとって、飢餓は最重要課題です。私にとって、特にエチオピア人として、アフリカの人間として、ハンガー・プロジェクトの関係者として、また人間として、不必要に飢餓で死んで行く人々、特に子供達の救命は、あらゆる優先課題の中でも最も優先すべき課題です。

アフリカへの特別なコミットメント

ホームズさんが指摘された通り、ハンガー・プロジェクトは長い間、アフリカに対して特別なコミットメントをしてきました。飢餓、貧困、予防可能な病気をなくし、国際社会で正当な立場を確保するためには、アフリカ国内と国際社会双方の特別な努力が必要であることは、長きにわたり認識されて来ました。

アフリカは大いなる可能性を秘めた大陸であり、鉱物資源、未開発の農地、水といった天然資源が豊富です。アフリカはまだ人口過密でもなく、人々には十分な土地があります。最も重要なのは、アフリカには創造的で素晴らしい人的資源があるということです。その人的資源に訓練と教育を施せば、国際社会に大いに貢献できるはずです。

しかしながら、お気づきかもしれませんが、アフリカは過去30年間で、食糧生産が着実に落ち込んでいる、世界で唯一の地域なのです。生産物の価格が下落し続けたことにより、また莫大な借金により、アフリカ経済は荒廃しています。アフリカの資源は、多くの国内紛争によって更に失われ、冷戦、南アフリカ政権の挑発、植民地時代の遺産から生じるその他の問題によって長期にわたり状況は悪化してきました。

アフリカ諸国が、経済的社会的発展を増強させるために必要な改革にむけて努力している一方で、ソマリアでの内戦や東・南アフリカを荒廃させている干ばつが、推定1800万人の命を脅かしているのを見るとがっかりします。干ばつの

影響を埋め合わせるために、追加資金を動員しない限り、アフリカ諸国が実施している経済改革は、脱線することもあり得ます。

また、ソマリアと南アフリカで、非常に多くの人々、特に子供達が死んで行く一方で、国際社会の目は、旧ユーゴスラビアのボスニア・ヘルツェゴビナで起こっている紛争の解決に集まっているのを見ることは、私にとってはつらいことです。

現在は、1984年から1985年までの、私の祖国エチオピアで目にした状況より更に悪い状況にあると思います。しかし、不運なことに、現在の危機に対する国際社会の対応は、悲惨なほど緩慢なままなのです。

更に、援助疲れがアフリカの問題に加わっているようです。これに関連して、日本のような援助国に確認したいことは、アフリカの開発への貢献と財政支援は必須であり、何百万人というアフリカの人々、特に子供達の生死に実際に影響しているということです。ご存じかもしれませんが、アフリカの子供は世界の子供の10%にしかならないのに、毎年世界中で亡くなっている1400万人の子供達の3分の1、つまり400万人以上がアフリカの子供達なのです。

こういったことが起こる最大の理由は、アフリカの乏しく貴重な財源が、人々の基本的な健康よりも、むしろ利払いに向けられていることにあるように私は思います。著名なアフリカ人、タンザニアのニエレレ前大統領も言っています、「私達(アフリカ人)は借金を払うために、子供達を飢えさせなければならないのか」と。

これらの事実に基づいて、アフリカが決して社会から疎外されないように、国際社会、特に援助国・機関が出来る限りの努力をするべきであると私達は思います。アフリカに必ず、自らの持続的発展を遂げるチャンスを与えるために、世界は追加資金を動員しなければなりません。

そうしたことがなされず、アフリカが無視され続けたとしたら、経済が種々の面で悪化し、ついには政治的不安定さえ生じかねないのです。

私が個人的にハンガー・プロジェクトの事業を評価しているのは、このような文脈に関してです。ハンガー・プロジェクトは、ユニークな戦略的イニシアティブを取りつつ、これらの大変困難な構造的な問題に着手しようとする、非常に数少ないNGOの一つであります。

これらのイニシアティブについては、ホームズさんに既に説明してもらいましたが、もう少し詳しく説明したいと思います。

アフリカ賞

第一のイニシアティブとして、まずお話ししたいのは、飢餓終結を持続させるための、リーダーシップに対して与えられるアフリカ賞についてです。

アフリカのために企画された、このユニークな賞の目的は、国家、地域、大陸レベルで、飢餓終結に目覚ましいリーダーシップを発揮したアフリカの男性または女性に、毎年栄誉を与えることです。

アフリカ賞はすべてのレベルで、またアフリカ社会の全ての部門におけるリーダーシップに対して与えられます。受賞には草の根的指導者の他に国家元首も含まれています。

この賞は、アフリカにおける危機的飢餓の解決が、まず第一に飢餓終結に捧げられた大胆な指導力に依存するという認識を反映したものです。アフリカ賞は2つの面で、飢餓の危機に取り組んでいます。

－まず、アフリカにおいて、私達の言うリーダーシップとは何を意味するのかを、アフリカの人々に明らかにしました。つまり、人々の福利のためにとられたリーダーシップという意味であることを明確にしたのです。アフリカにおいて、その賞は指導者たちがその優先順位を練り直して、勇気をもって飢餓の問題を解決するよう奨励しています。また、優れたリーダーシップとは実際何か、どんな可能性があるのか、という積極的なモデルをアフリカ賞は提供しています。

－第二に、アフリカの外ではというと、飢餓撲滅に向けて努力している、国際的パートナーシップに値する偉大なるリーダーが、実際にアフリカ社会の様々なレベルにおいて存在するという事実に、国際社会の注目を引き付けたのです。アフリカについてあまりに多くの否定的報道があったにもかかわらず、アフリカのリーダーシップ賞は、アフリカで起こっている、一般大衆がめったに耳にすることのないサクセスストーリーに、世界的、積極的なスポットライトを当てることに成功しました。

その権威ある国際的審査委員会、アフリカ賞の受賞式に招くレベルの高い講演者、またユニークな衛星放送を通じて、ケープタウンの大司教であるツツ司教の言葉を借りますと、アフリカ賞は「一つの希望の光」を提供したことになります。また、それはアフリカ賞受賞者だけでなく、国連事務総長、ジェシー•ジャクソン牧師、英連邦事務総長、世界銀行の元総裁2名といった、国際的な

方々がアフリカの擁護を呼びかけることができるよう、重要な国際フォーラムを提供しています。

アフリカン・ファーマー・マガジン

第二のイニシアティブとして、皆さんに説明したいのは、ハンガー・プロジェクトが出版するアフリカン・ファーマー・マガジンです。

これは本当にユニークで重要な雑誌であり、アフリカ農業の問題並びに戦略と行動に関する資料として、アフリカの政策担当者の1つの手段となりました。また、アフリカの小作農民にとっては、食糧自給、食糧安全保障、飢餓終結のための適正技術の移転などの手段になっています。

アフリカに馴染みのない方々は、独立後長い間、開発計画において、食糧生産が概して軽視されてきたのを知ったら、驚かれるかもしれません。これは植民地時代から受け継がれてきた輸出用農作物の重視、そして換金作物生産を好んだ世界銀行などの機関が、70年代にアフリカ諸国に与えた誤ったアドバイスがその原因でした。

その上、アフリカの農業政策は農民に不利なものでした。政治的に力をもっている都市の住民を助成するために、農作物の価格は不自然に低いままだったからです。農民の地位は大変低く、彼らの声は政治の舞台には届きませんでした。

このことは、大規模な工業化を遂げた後でさえ、食糧生産はいまだに非常に優先され、その生産に携わる農民が強大な政治的権力をもっている日本の皆様にとっては、驚くべきことでありましょう。

1984年から1985年までの食糧危機の後、アフリカ諸国はこの状況を逆転させることに力を注ぎました。農業を「優先事項の中の優先事項」であると宣言し、予算の25%まで農業につぎ込んだのです。しかし、必要とされる政策改革が人々の十分な支持を獲得すべきであるなら、都市住民や政策担当者は必要な犠牲を実際に受け入れ、まさにアフリカの将来を握っている存在として、農民を評価するように、その態度を改めるべきなのです。

これが、アフリカン・ファーマー・マガジンの中心となるメッセージです。それはアフリカの食糧生産に携わる農民の地位を向上させ、彼らの声が政策決定機関に届くよう、そして人々が農民を堅い信念をもった、賢いヒーローとして認識するように企画されました。

セネガル・戦略的行動計画

第三のイニシアティブとして話し合いたいのは、戦略的行動計画です。ホームズさんからお話しがありましたように、また、スワミナーサンさんも後でお話しくださいますように、戦略的行動計画は、開発分野における計画面、行動面での新しいアプローチなのです。

ご承知の通り、アフリカの開発計画は従来、実情から掛け離れたところにいる専門家の手によって行われていました。計画は首都にいる専門家たちによって練られ、実施に向けて官僚や地方当局者に伝えられていました。そして実際は、計画は思いどおりにいった試しがなく、狙いが失敗に終わったこともしばしばでした。

計画がうまくいかなかったのは、第一に、国民が彼らの本当のニーズや計画の目的について、相談を受けることがなかったからです。従って、国民は計画を支持しないわけです。国民自身は、自分の計画であるという感覚がないので、そんな計画の実施には積極的に参加しようとしませんでした。

中央集権的な旧式の計画作りの欠点は、世界の至るところで露見していますが、元社会主義国であったアフリカでは特に、また私の祖国であるエチオピアでも、最近までは同様の例が見られました。これらの欠点は、資源も下地となる組織もほとんど無いアフリカでは、拡大しました。アフリカでは、どんな計画でも企業でも、それが国民全体の利益になるためには、国民のエネルギーを動員することが必須です。

国連アフリカ経済委員会の元幹事、アデッジ教授は、1989年アルーシャでの会議で次のように言いました:「(アフリカの)私達にとって、一般大衆の開発への参加はぜいたくなことではなく、生きるか、死ぬかの問題です」と。

問題は、どうやったら、人々が参加してくれるようになるかということです。世界で最も困難な問題の一つは、官僚的アプローチから民主的なアプローチに転換することであることは、皆が承知しています。これが、ハンガー・プロジェクトの人的開発が技術的に大変ユニークであり、重要なところなのです。

1990年、インドの計画委員会と共に戦略的行動計画に初めて着手した時、私達はそのことをセネガルのアブデュ・デューフ大統領に知らせたので、セネガル地方開発省の役人が、インドで始まったプロセスを見るためにニューデリーでの会議に派遣されました。

その会議の後、セネガルの大統領は、セネガルで同様のプロセスに着手するため、ハンガー・プロジェクトを招待しました。

1991年3月、国民戦略会議がセネガルで開催され、セネガルの首相が議長を務めました。この会議では、新しい国家戦略をつくるためにセネガルで初めて、社会のあらゆる部門が平等のパートナーとして集められました。

政府の主要関係省庁、学会、農民団体、女性団体、NGO、国連の特別機関、経済界のリーダーが同じ土俵に立って、国家戦略会議の協議に参加しました。

この会議では、その後の事業を導くための統一ビジョン、「戦略的計画」が作り出されました。この戦略的計画とは、「セネガルの地方住民の食糧自給と福利のための、総合農村開発」です。

国民戦略会議でデザインされた戦略を練り上げ、実行するために、セネガルのあらゆる部門を代表する、21名の国家理事会のメンバーが選ばれました。この理事会そのものは、法的に承認されたNGOとして設立され、戦略目的の設定とセネガルの遠隔地で行う行動計画を作成するために、定期的に会合をもっています。

この行動計画はセネガル北部の2カ所で始まっています。そこでは、村が必要とする特別なプロジェクトを明示し、実行するために、村の理事会が設立されました。

このプロジェクトは「触媒的」性格のもので、つまり、それぞれのプロジェクトは、他部門の発展に対して直接かつ同時にインパクトを与え、より広範な社会に便益をもたらそうというものなのです。

例えば、あるプロジェクトは、女性の読み書きの能力に焦点を当てました。読み書きができれば、女性は新たなプライドと力を持ち、家族のために健康や栄養のより良い情報を得ることができるようになります。そして、生産性も向上し、収入も増えて、家族も助かるわけです。

その他の触媒的プロジェクトとしては、特に女性を対象とするより広範囲な保健医療サービスの提供、若者を対象とする基礎教育及び職業訓練、そしてより良い農業生産と食糧安全保障のための、適正技術の移転を保証することによる果物や野菜の生産を通じての食糧増産、などがあります。

セネガルの国家理事会は、これらのプログラムに対して国連機関の高い関心を呼び起こしました。そして、このアプローチを向こう2年間、全国に広げていく予定です。

そういう意味で、ハンガー・プロジェクトは、適切な資金の入手が可能になれば、戦略的行動計画というこの方法論を、セネガルの全国民と他のアフリカ諸国においても展開していくつもりです。

世界青年会議

ハンガー・プロジェクトの最後のイニシアティブとしてお話したいのは、ホームズさんからも説明のあった、世界青年会議です。

このユニークなイニシアティブは日本ハンガー・プロジェクトが先頭に立って進めており、子供の生存・保護・発展に関する世界サミットで採択された行動計画の実施にあたり、世界の若者に自分たちの役割を明らかにする機会を与えています。1991年、京都で世界青年会議が初めて開催されてから、今年は5つの地域で会議が行われました。

特にアフリカ青年会議は、西アフリカのブルキナ・ファソで8月に開催され、そこで採択されたオウアガドウゴウ決議にも反映しているように、飢餓の問題に対するアフリカの若者たちの成熟度、認識、責任感に大変感動しました。

この青年会議を通して、ハンガー・プロジェクトはアフリカに、飢餓終結のための共同戦線と積極的なパートナーシップを、若者と政府との間、地方及び国際的NGOと様々な国連機関、特にUNICEFとの間に構築しました。

世界青年会議はまさに、飢餓終結の過程における画期的な偉業であり、奨励、支援に値するものです。

ハンガー・プロジェクトと*JICA*間のパートナーシップ

上記説明のイニシアティブにおける、ハンガー・プロジェクトとJICA間の具体的な協力の機会についてお話したいと思います。

- 第一に、JICAには、飢餓終結に関する国民教育を充実させたいという強い意向があるのと承知しています。例えば、1993年に東京でアフリカ賞を開催するのを支援し、アフリカ賞の資料や日本語のテレビ番組製作に資金を投じることは、国民にアフリカでの業績について知らせる絶好の機会となるでしょう。
- 第二に、アフリカン・ファーマー・マガジンは双方の利益になるはずです。JICAの資金で、総合農村開発と食糧安全保障のためのアフリカン・ファーマー・マガジンとアフリカのラジオ番組をより広範な地域で活用できるようにすることが可能でしょう。また同時に、これを利用すれば、日本の開発・政策担当者がアフリカの実情にもっと敏感になるわけです。

－第三に、最も重要なのは、ハンガー・プロジェクトは戦略的行動計画がアフリカで利用できるように、今後JICAとパートナーを組んで励むことが可能であるということです。日本の開発援助をアフリカに供与する過程で欠かすことのできないのは、その援助が実際に貧しく飢えた人々に届き、アフリカの制度や人的資源が強化されるような方法を取ることです。

結論

最後になりましたが、アフリカでのハンガー・プロジェクトの活動について、皆さんにお話しする栄誉にあずかり、本当に有り難うございました。

お話した提案について、この後、質疑応答が行われるのを楽しみにしています。

貧困を緩和し、飢餓を根絶するために、一致協力し国際的なパートナーシップをもってすれば、多くのことができると信じています。また、私達は、アフリカ大陸により明るい未来を保証することに、貢献できるのです。

ご清聴、有り難うございました。

質疑応答

司会（河西）：タデッセさん、どうも有り難うございました。予定の時間を多少超過いたしておりますけれども、引き続きまして質疑応答に入りたいと思います。

榊原：リザルツというボランティアをやっている榊原と申します。ハンガー・プロジェクトさんにもJICAさんにもお願いがあるんですけれども、今年、私はバングラデシュに行って来まして、グラミン銀行――貧民銀行とか農村銀行とか言われているんですけれども――、120万人のもっとも貧しい人たちが加入している銀行をちょっと見てきたんです。そのうちの110万人が女性で、どのぐらい貧しいかと言うと、だいたい1着しか洋服をもっていない。だから洗濯をすると外に出られない。そういうようなところを見て来たんですけれども、ですからそういうところで非常に女性たちががんばって、一生懸命やっていると。

だからそういうところで、そういった団体を、いま世界の20ヶ国、60ヶ所ぐらいで、アフリカ、中南米、そういうところで応援しているんです

けれども、そういう組織をうまく取り込んで、なんとか2000年までに飢餓とか貧困を終わらせていただきたいと、NGOを含めて。それでJICAさんにお願いしたいのは、自分たちが全部やらなくてはいけないということではなくて、バングラデシュには優秀な人がいっぱいいますので、そういう人たちもうまく活用というか、一緒に協力してやっていければいいのではないかと、私は考えているんです。ソマリアでも貧民銀行があり、アフリカにもそういう流れも出てきましたので、自立援助の方向をさらにご援助していただければありがたいと思います。これは提案です。

タデッセ：私はほんの数週間後に、バングラデッシュに戻ることになっています。バングラデッシュでは、アベットさん、ユニスさんや他の組織の指導者に会います。私達がやろうとしていることは、協力的な戦略フォーラムを開くということです。そうすれば、政府、非政府を問わず全ての組織の指導者が集まって、バングラデッシュが直面している主な問題を確認できるからです。また、そういった作業や協力を進めていく方法を見つけるという目的もあります。ですから、私はあなたのコメントを大変有り難く思いました。ハンガー•プロジェクトは、戦略的なフォーラムを提供するために、バングラデッシュにおけるハンガー•プロジェクトの関係者と協力しているわけです。そうすることで、あなたが説明して下さった種類の協力が、バングラデッシュで果たされるようになります。

司会：有難うございました。JICAに関してのご希望につきましては、承っておくということにさせていただきます。それではつぎの方、どうぞ。

ムトゥンフ：ジンバブエの駐日大使です。あなたの組織は、ソマリアの内戦が終結した後に、戦略的行動計画をおこすための予備計画を立てておられますか。

司会：いまのご質問について。

タデッセ：戦略的行動計画を始めるためだけでなく、ソマリアで何をするにしても、まず必要なのは平和です。そういった意味で、9つの戦闘派閥が交渉の場に集まり、ソマリアで政権をつくれるように、国連安全保障理事会が3500名の軍隊を派遣してくれることを希望しています。

司会：大使、いまのお答えでよろしゅうございますか。

ムトゥンフ： はい。

司会：それではつぎの方、どなたかどうぞ。

チョードリー： チョードリーと申します。日本でユニセフの理事をしています。私共は国連機関として、本日ここで素晴らしい発表を伺い、本当に良かったと思っております。

タデッセ部長も言われた通り、ユニセフの仕事はずっと、ハンガー・プロジェクトと非常に密接な関係があります。日本での世界青年会議にも参加しています。アフリカの子供がおかれている状況について言及がありましたが、そういった意味で申し上げたいのは、アフリカ統一組織(OAU)はアフリカの子供を助けるために来月11月25日から27日までセネガルのダカールで、国際会議を招集するということです。これは世界子供サミットでの決定を実施することに焦点を絞った、大きな国際会議となるでしょう。特に子供と女性のためにアフリカ諸国によって準備されて来た、国家行動プログラムも焦点となります。日本政府と日本の関係組織はこの会議に興味を持ち、アフリカの子供達の生存、保護、発展を重視する点で、国際社会に参加して下さると私達は信じています。本日のセミナーが、アフリカの子供達への日本の援助における、私達の共通の努力に弾みをつけ、その原動力となることを希望しています。

Ⅲ．開発途上国における食糧生産の向上について

友松篤信
宇都宮大学農学部助教授

この地球の全人口53億人のうち9億5千万人は極度の貧困にあると言われている。その内訳は、アジア5億人、そのうち、南アジア3億5千万人、サハラ以南アフリカ2億8千万人、中南米8千万人である。

貧困の特徴は地域により異なる。アジアの貧困層は、農村の土地なし農民と都市の不完全就労者である。サハラ以南アフリカの貧困は、干ばつ、森林破壊、および砂漠化などによる農業条件の悪化と、急速な人口増加が原因である。中南米の貧困は、都市農村間の経済格差および不安定な政治経済状況が特徴である。サハラ以南アフリカとは、サハラ砂漠より南に位置するアフリカ地域を指す。サハラ以南アフリカには、LLDCと呼ばれる最貧国の70%、28ヶ国が集中する。サハラ以南アフリカ総人口の25%は貧困状態にある。また、この地域に一歳未満乳児死亡率50を下回る国はない。

サハラ以南アフリカの農業生産性の低さは、一人当たり年間穀物生産量の低さに示される。サハラ以南アフリカにおける一人当たり年間穀物生産量は130kgであり、他地域の途上国平均270kgの半分に過ぎない。食糧生産の年間伸び率は、1960年代2%、70年代1.5%、80年代前半は1%と、次第に低下している。一方、人口は年率3%で増加した結果、食糧自給率は過去15年間で92%から82%へと下降し、FAOによれば2010年には56%に低下すると予測されている。このような食糧生産水準の低さが、飢饉発生の背景にある。

農業生産性の低い原因は、第一に、自然環境条件にある。大規模な干ばつは、ほぼ10年に一度の割合で起こる。1980年代半ばの干ばつで、サヘル地域に深刻な飢餓が発生した。サヘルとはサハラ砂漠南縁地域のことで、マリ、ニジェール、チャド、スーダン、エチオピアなどが位置する。最も干ばつが深刻であった1984年には年降水量はエチオピアで22%、スーダンで50%減少した。1980年代半ばの干ばつと軍事紛争の結果、餓死者はエチオピアで百万人、スーダンで50万人発生した。また、砂漠化、土壌流失などによる環境劣化により、サハラ以南アフリカ耕地面積の22%が被害を受けている。

第2に、灌漑施設などの農業インフラが十分でないことである。耕地の95.8%は天水依存のため、降水量の変動は農業生産に著しく影響する。

第3に、施肥量が少なく、優良種子の使用が少ないことである。施肥量の途上国平均62kg/haに対し、東および南アフリカでは11kg/ha、中部および西アフリカでは6kg/haと極めて少ない。メイズを例にとると、未改良の在来種の栽培面積が、途上国平均で47%であるのに対し、東および西アフリカでは60%、中部および西アフリカでは80%と高い。

アフリカ農業の担い手は、Subsistence Farmerと呼ばれる小農である。小農は、農耕と畜産による自給食糧の生産を主とし、ピーナッツ・ワタなど換金作物も生産する。アフリカの食糧生産を向上させるには、小農の天水農業を改善する必要がある。そのためには、地下水開発による水の確保が必要である。次に、改良種子、肥料、畜力耕の普及が課題である。ソルガム・ミレットなどの加工・輸送・流通システムの整備も重要である。また、消費拡大中の米の増産のため、低湿地開発の必要性が叫ばれている。

小農による農業生産の特徴は、共同体の土地制度や習慣の制約を強く受け、外部経済とのつながりが弱いことにある。小農の特徴は、最大の利益より最小のリスクを尊重し、外部技術の受容に消極的なことである。

小農による農業生産の改善の可能性につき、4つの成功事例を考察する。

1）営農体系研究（国際研究機関）

営農体系研究は、1976年国際トウモロコシ・小麦改良センター(CIMMYT)の発案によるアフリカ天水農業研究法である。

この研究法の特徴は、小農の営農体系診断、技術的問題の試験圃場での解明、小農の圃場での実証試験を実施し、技術的のみならず社会経済的にも検討する点にある。小農の圃場では、研究者、普及員、農民とが、協力しあうのも特徴である。また、この研究法では、高収量よりも生産の安定化や持続性が重視される。

この研究法は、従来の研究法の限界を越えた画期的なものである。

2）ジンバブエでの小農対象の食糧増産計画（途上国）

この計画では、メイズに価格インセンティブが与えられた。また、穀物集荷場、穀物貯蔵場、および、種子・肥料・農機具の販売所が設けられた。一方、普及員を増やし、技術指導を強化した。しかし、最も効果があったのは、農作業の主役である婦人に土地所有・農業訓練・融資の面で、男性と対等の権利を法的に認めたことであった。

これら施策により、ジンバブエは、80年代後半に小農によるメイズ生産の割

合を3分の1から2分の1に高め、余剰食糧の輸出増大に成功した。

この計画は、小農、特に、婦人を対象とした増産計画の成功例である。

3) 笹川グローバル2000計画（日本のNGO）

このプロジェクトでは、改良種子と化学肥料を農民に提供し、農民の畑で農民を直接指導する方式を取った。さらに、実際の収益増を確認の上、農民に種子・肥料代金を返済させた。返済金は回転資金とした。この計画は、1986年ガーナの40戸の農家で始められ、3年後には7万戸に拡大した。返済率は77%と高く、メイズ収量平均は2.5倍に増加した。

この計画は、ガーナ政府の要請に答えさらに急速に規模が拡大された。その結果、技術指導や資金回収が追いつかず、80年代始めに失敗した。しかし、この計画は、伝統的農法に頼る小農への技術普及法を示唆するものとして、評価されよう。

4) ニジェール・地方分散型多目的倉庫建設（日本の無償援助）

日本政府は、ニジェールの農業信用組合に対し、食糧倉庫を20カ所の拠点に建設した。この倉庫は、穀物貯蔵のほか、肥料販売・農機具貸出し、雑貨販売所、製粉所、集会所など多目的な機能を持つ。

この建設で農業信用組合の活動が飛躍的に高まり、ニジェール婦人協会から日本政府に感謝状が寄せられた。この協力は、ODAによる大規模なインフラ整備を、現地のニーズに合わせてきめ細かく改善した点が評価できる。

4つの成功事例から、アフリカ農業開発では、小農、婦人、現地実証、地方分散、住民参加がキーワードであることが示唆される。

日本はアフリカ農業に対しどのような協力を行っていくべきであろうか。まず、日本のODA、NGOの現状を振り返る必要がある。ODAの特徴は、食糧援助、食糧増産援助、および、地下水開発である。食糧援助として、サハラ以南アフリカのほとんどの国に毎年各国2億円程度の食糧が供与されている。食糧増産援助は肥料、農薬、農業機械を供与する援助で、1990年度にはサハラ以南援助対象国43ヶ国のうち31ヶ国で実施された。地下水開発は同年度に16ヶ国で実施された。

アフリカにおける日本のNGO活動の全貌は明かではない。難民援助では、ソマリア、エチオピア、ケニア、ザンビアで、日本ボランティア・センター、日本赤十字、国際飢餓対策機構、天理教、難民を助ける会などが活躍している。これらNGOの活動は、食糧・医療の緊急援助から、農業、植林、教育、職業訓練へと次第に多様化した。こうして難民救済を契機に、NGOの現地活動が深化発

展している。NGOの中核的メンバーに、青年海外協力隊の経験者が多いのも特徴である。

アフリカ農業の専門家は、派遣経験のある技術協力専門家500人、協力隊員経験者900人、コンサルタント会社技師200人、研究者50人、NGO100人、合計1750人と推定される。

日本のアフリカ農業研究は黎明期にあり、アフリカ農業情報の蓄積は十分ではない。したがって、日本の技術協力は研究協力から始めて情報蓄積を図り、資金協力ではインフラ整備が中心となろう。また、ODAとNGOとの関係では、ケースバイケースで有効な協力関係の構築を図るべきであろう。

ODAは、保守的で出足が遅いが、インフラ整備など大型投資に特徴がある。NGOは先駆的で出足が早く、草の根レベルの協力に特徴がある。近年、ODAは、経済合理主義に基づく大規模開発だけでなく、NGOから学び、地域開発、BHN、内発的発展を重視しつつある。ODAはNGOに歩み寄りを見せている。このことは、ODAとNGOが国際協力の両輪として成長していることを示唆している。

飢餓問題に限らず国際協力では、ODA、NGO、途上国が相互に経験を学び合って、失敗やロスを最小限に止め、全体の効果を高めることが重要である。

質疑応答

司会：友松先生ありがとうございました。サブサハラ・アフリカの4つのケースと食糧生産を増大するに当ってのその他の可能性についてもお話しいただきました。講師の先生方もフロアの皆様方もたいへんご熱心な方ばかりでございまして、時間がかなり大幅に遅れてきておりますので、質疑を多少短めにさせていただけないかと思うわけでございますが、どうぞご希望の方がございましたら、お手をおあげください。

アスコー：JICAの企画部のものです。

ホームズさんもしくはハンガー・プロジェクトの方に伺います。JICAとハンガー・プロジェクトが将来やっていけると期待されている協力について、できればもう少し具体的にお話し頂けますか。そういった言及もなさいましたが、もう少し明確に言って頂きたいのですが。

ホームズ：JICAが戦略的行動計画を支援して下さっていますし、セネガルとイン

ドでの計画については、既に提案を出しており、協力して頂きたいと思っています。JICAには、私達が戦略的行動計画を展開している国々で、協力して頂いているからです。1993年、東京で開かれるアフリカ賞にJICAが支援くだされば、とてもうれしいのですが。そうしてくだされば、日本だけでなく他の世界にも貢献することになると思います。アフリカン・ファーマー・マガジンをもっと普及する上で、JICAと協力していきたいのですが、この雑誌はアフリカの農民の間で革命を起こしつつあるように思います。それはJICAが支援の重点としている問題の一つなのです。また、JICAには、日本のハンガー・プロジェクトによる適切な指導のもとで行われている、若者の国際的運動を支援して頂き、光栄に思っています。本当はもっと色々あるのですが、時間もありませんので、このくらいにしておきます。私達は大変具体的な構想を持っています。

室：室です。友松先生のニジェールの例なんですが、そこで日本の無償資金協力ということを言われたんですが、これは3年前に始まった小規模無償資金協力のスキームなのか、それとも従来の、いわゆる資金協力なのか、その点をちょっとうかがいたいと思います。

友松：それは従来の無償資金協力でございます。

室：ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。それではもう一方、お願いします。どうぞ。

質問者：友松先生は森林伐採と砂漠化の問題について指摘されましたが、調理したり、特に寒いところでは暖房したりするのに、木を伐採するしかないような地域に対して、何か解決策をお持ちですか。代替エネルギーがない限り、植林は続きます。環境破壊につながらないために、何か提案がおありですか。

友松：森林の資源枯渇の問題であります。どのようなオルタナティブがあるかということですけれども、私自身はODAに長く関与してきまして、ODAの観点からひとつ言うとしますと、現在、日本の農水省が1つの構想を立てております。その構想と言いますのは、緑の防衛帯——グリーン・ベルト——構想という非常に大規模な構想を立てているわけです。これはどうい

う構想かと言いますと、ニジェール川は4つの国を流れる国際河川でありますけれども、ナイジェリア、ニジェール、マリ、ギニア、そこを流れるニジェール川の流域、3500kmに10kmの巾で大規模な植林ベルトを造成しようという計画です。これはいわば、現代の万里の長城、中国にあります万里の長城の現代版と言えるかもしれませんが、これによってサハラ砂漠の南下をくいとめるという計画であります。コストは2兆円が見込まれておりまして、計画としてはグリーン•ベルトと、もう1つは地下ダム、地下水を貯蔵する地下ダムをいたるところに配置するという大規模な構想であります。現在の森林資源の枯渇に対しては、すぐオルタナティブなメジャーを示唆することはできませんけれども、ODAの立場から言えば、そういう構想を世界の人が話し合って、日本一国では、もちろんできないわけでありますが、そういう大規模なプロジェクトに着手していくということがやはり来世紀に臨む1つの大きな方策ではなかろうかというふうに思います。

Ⅳ．永続的栄養保障の達成：非凡なる機会

M.S. スワミナーサン
ハンガー・プロジェクト世界理事

1. 飢餓への挑戦

永続的栄養保障には、バランスのとれた食事、安全な飲み水を常に全ての子供、女性、男性に供給するための、物理的アクセスと経済的アクセスが含まれます。家庭における栄養保障は、地球に生まれてきた子供達一人一人が、生まれつきもっている身体や精神の発達の可能性を保証する上で、欠かすことのできない必要条件です。それゆえに、栄養保障は人間が基本的に必要とするものなのです。

第二次世界大戦以来、陸上、水生の農業システムの生産性を向上させるプロセスは目を見張るものがありました。例えば、インドでは独立した1947年までは、飢饉が頻発していました。独立以来、インドは農業発展を促進させ、国際社会からも折よく援助を受けることにより、飢饉を免れてきました。しかしながら、国民の約25％が不十分な購買力しか持ち合わせていないことから、栄養不足が依然として広がっているのです。そういった慢性の飢餓を克服するためには、食糧生産とその配給に対して同時に注意を払わなければなりません。この目的のために、資源に乏しい農民と消費者は、国からも国際社会からも適切な援助を受ける必要があります。

世界には、毎夜おなかをすかせたまま床につく子供、男女が6億人以上います。こういった飢餓の主な原因は、世界の所得配分の著しい格差であり、避けることができるものです。1991年では、世界人口の約20％が、世界の所得の83％近くを手にしました。最も貧しい20％の人々は1.4％しか獲得できませんでした。(国連開発計画(UNDP)の1992年度人間開発報告参照のこと。)

10億人を越える人々が抱える、経済的疎外の深刻化を更に複雑にしているのは、永続的農業のための生態学的基盤への損害が増えつつあることです。第二次世界大戦後、10億ヘクタール余りの良質の土壌が様々な程度において荒廃しました。きれいな水源は汚染のみならず枯渇しつつあります。漁獲高は持続可能限界を超えています。様々な生物が生息している、熱帯雨林のような地域は

害されつつあります。炭素の排出と吸収のバランスが一層崩れており、世界的に気候や海面が変化する可能性に繋がっています。近代的なライフスタイルや科学技術によってもまた、紫外線-Bの放射が強まる恐れが出てきました。このように、10億人余りの人々のライスタイルが持続せず、別の10億人余りの人々が受け入れ難い貧困を体験していることから、地球の平和と安全が危ぶまれています。ブラントランド環境•開発委員会は、共通のより良い将来のために、新しい地球倫理の創造を呼びかけました。共有する今という時をより良くするための、新しい社会的議題を提案する上で、日本がリードする出番がいよいよきたのです。

2. より良い今のための非凡な機会

現在世界的に、技術、財政、経営面の資源を軍拡競争から開発に転換させるための、貴重な機会があります。このプロセスはしばしば、「平和の配当」と言われています。日本の成した実績が証明しているのは、飢餓のない世界にしようと励むための、貴重な機会があるということです。日本は今、世界の所得の14%に相当するGNPに達している一方で、世界的な二酸化硫黄の放射問題に1%、二酸化炭素の放射問題には2%しか貢献していないのです。日本人の科学者が小麦において確認したノーリン10という矮小遺伝子は、第三世界における小麦革命の基礎を提供しました。日本の小規模農業(日本の1農家当たりの農地は1.4ヘクタールのみ)の実績は、バングラデッシュ、中国、インドのような人口が多くて土地が豊かでない国々の食糧生産についての目標がいかに達成できるかを、示しています。日本は一世紀余り前には農業国でしたが、今世紀中には工業大国になりました。情報技術の分野では、今や世界のリーダーです。日本は農業、工業、情報社会の一番良いところをうまく調和するやり方を示してくれています。このことが、気づかいし、節約し、共有することを民族精神の核とする保全的社会を生み出す道なのです。この意味において、日本は、永続的な飢餓終結を2000年までに達成することに専念する世界連合を発足させる上でリーダーシップを取るといった、ユニークな機会を持っています。そういう訳で、ハンガー•プロジェクトによってバングラデッシュ、セネガル、そして他の国々に導入された方法論、戦略的行動計画について簡単にお話ししたいと思います。

3. 戦略的行動計画

まず、この方法論を理解するために、枠組みについて説明したいと思います。

この新しいアプローチを作り始める時に、私達は従来の中央集権的な計画の限界を克服するため、次の4つの基準を満たさなければならないと考えていました。

1. 計画は実行に移す人々がつくらなけらばならない。外部の専門家によって「伝えられる」ものではない。
2. ダイナミックな計画でなくてはならない。変わり続ける状況に順応し、臨機応変でなければならない。
3. 政府、NGO、学会、政界など社会の主要部門を全て含んでいること。
4. 行動を直接生み出す計画であり、将来の計画のためにタイムリーなフィードバックを提供するものであること。

私達は、1990年11月の「共通の課題に向かって」と題する国民会議を開催するために、インド政府計画委員会にこの枠組みの中で招かれたのです。政府、ボランティア組織、調査機関、企業、国連機関の代表など、インドのあらゆる地域の専門家がこの会議に参加しました。

この会議は「境界点にたどりつく:健康で生産的な生活のチャンスをすべての人に」と題する、私達の戦略を導くため、統一された力強いビジョンを創造しました。

この「境界点」という考え方が大切なのです。あまりにも長い間、人間の発展はいわば「灰色」の連続と認識されていました。つまり、決定的な道標もなければ、本当の発展は可能であるという意識もないまま、絶え間無くもがき続けていたのです。例えば、小麦と米の高収量品種は、一つの境界点を意味しました。小麦と米に関して、豊かな土地、水と穀物の管理の重要性を学んだ農民たちが、他の穀物にその技を転用したからです。グリーン革命はこのように始まりました。

計画委員会とのこの会議が主に示しているのは、戦略的行動計画のプロセスは州レベルで取り上げられるべきものだということです。人間の発展という問題に対して主な責任があるのは、州だからです。

従って、私達はこのプログラムをまず、マハラシュトラとタミル・ナドゥの2つの州で取り上げました。その後、グジャラット、西ベンガル、カルナタカなど3つの州も始めました。

ある州でこのプロセスを始める第一段階は、議長を見極めることです。つまり、その人の名声、決意、民衆の組織からの信頼そして政府との繋がりが十分で、新しいアプローチに対するいかなる惰性や反抗も克服できなければなりません。

第二段階は、バックグラウンド・ペーパー、つまり国家の飢餓と貧困の現状に関する徹底的なレポートを作成することです。これは協議のための共通の出発

点を提供してくれます。このレポートは、全ての人の生産的で健康的な生活実現に向けての進展を評価できるようないくつかの指標を提供すべきです。

第三段階は、いわゆる「デザイン・ミーティング」と呼んでいる会議を開催することです。これは、あらゆる部門から関係する専門家やリーダーを招いた会議です。この会議は、最優先されるべき諸行動課題を見極め、それらを「戦略的諸目的」として一本化されうるように構成されます。

第四段階として、戦略的目的の達成に要するリーダーシップや責任を提供するために、小さい代表委員会が組織されます。この委員会もまた、社会のあらゆる部門を代表します。肝心なのは、政府の妥当な関係者がこれに含まれていることです。主要官庁の次官の方々がそのような非政府委員会のメンバーとなってくださったことは、とりわけ私達の喜びでした。ユニセフ、世界保健機関(WHO)、国連開発計画(UNDP)などの関係国連機関は参加するよう招待されます。

第五段階では、国家評議会はいわゆる「触媒プロジェクト」に着手します。これは次の4つの枠組み分析の中で、戦略的に選ばれます。

- 進行している努力と投資からの恩恵を最大にするように、既存の事業における決定的なギャップを埋める行動。
- 一定の資源の投資によって複合的な利益が生まれるように、既存のプログラムを一点に結集する行動。
- 共同作用を生み出す行動。改善をより一層かきたてることができるように、相乗効果のある活動を結集する方法。社会的組織的共同作用は、小さなプログラムを大きな運動に変える手助けとなり得る。
- より良い政策の基礎を提供する行動。つまり、国のあらゆるところで、大規模な変化を生み出せる行動。

最後の段階として、国家評議会は、状況や教訓をしばしば振り返り、行動の新しい活路を見極めることによって、この戦略的アプローチのダイナミズムを維持します。

このプロセスがいかに機能するかを、もっと具体的に認識して頂くために、特定の例をいくつかあげてみます。

たとえば、タミル・ナドゥという州では、委員会は女児に対する家族の認識を改めて軌道修正する必要性を確認しました。これは主として、両親が娘を経済上の負債と考えているのに対して、息子を資産とみなしているからです。

従って、理事会の戦略的目的は、両親が次第に、娘も息子同様に貴重であると考えるようになるように、「経済的な女性」(economic woman)という概念に気づ

かせることです。

これを実行するため、触媒プロジェクトではまず、国に映画•音楽産業を作るための会議を開きました。この行動は次々に、新しい行動の糸口を生み出しました。つまり、短編映画、テレビコマーシャル、マスメディアに浸透している流行歌などの大衆メディア•キャンペーンを作り上げたのです。

二つ目の例

マハラシュトラでは、基礎的健康、教育、水道•衛生サービスの普及が、戦略的目的でした。政府はこれに対して責任があるのですが、現在の努力では予知可能な未来に目的を達成するには不十分です。

政府とボランティア組織間の共同作業を増やせば、明らかに違って来ます。同じお金を使うにしても、それをボランティア組織を通して使えば、政府ははるかによい結果を生むでしょう。NGOの方が機能的に柔軟性があり、地方の状況に対しても順応性があるからです。

委員会はこの変化を波及させるために、いくつかのプロジェクトに着手しました。政府と様々な民間団体のグループとで委員会が開かれ、両者が実際に協力する方法を明確にしました。

1991年から1992年までに、委員会によって是認された30の触媒プロジェクトの中には、結集行動の多くの例がみられます。

- 昼食•保育センターを、大人の職業訓練や保健教育の連結ポイントとして利用するプロジェクト。
- 村での栄養監視と野菜栽培訓練を結合させ、村人が栄養上の弊害及び野菜療法分析に基づいて栄養上の欠乏を解決する食糧を正確に栽培できるように訓練するプロジェクト。
- スラム街に住む女性が健康、教育、訓練といった多目的センターを運営して行けるように、彼女らを組織するプロジェクト。

4. 結論

過去2年間に、ハンガー•プロジェクトは非常にささやかな資力をもって、人間の発展のための戦略的アプローチの価値を証明してきました。

将来に目を向ける時、私が私達の方法論から強調したいことは、戦略的行動計画におけるハンガー•プロジェクトとJICAとの正式な協力が、飢餓の永続的終結に大いに貢献するだろうと、私が感じるのはなぜかということです。

第一に、明らかにギャップが存在するということです。さまざまな文化や指導体制が違っても繰り返して利用できる方法論が、私達にはあります。その一方で、必要に迫られた地域にこの方法論を広げるだけの十分な資金、人的資源がないのです。

第二に、結集の機会があるということです。JICAには人材も資金もあり、飢餓を排除するためにそれらを活用したいという意向があります。ハンガー・プロジェクトは効果的というだけでなく、文化的、社会的にも適切な行動がとれるように、地方社会の中において戦略的思考のできる才能のある人を動員してきました。日本の大きな強みは、そのコンセンサスを構築する過程に関心があるということであり、私達は人間の発展過程にそのようなコンセンサスを構築するための方法論を開発してきました。

第三に、私達の相互の貢献をより大きくするための、共同作業の機会があるということです。既に指摘しましたことに加えて、JICAは技術訓練とインフラストラクチュアの開発について、非常に多くの専門知識をもっています。ハンガー・プロジェクトは開発途上国における多くの支持者とのコミュニケーションには精通しています。JICAとハンガー・プロジェクトが戦略的行動計画という共通分野で協力すれば、こういった多様な可能性を結合させることから、思いがけない新たな機会が生まれる可能性が出てきます。

第四に、政策変換の機会があるということです。JICAは明らかに、その人間の発展への貢献が、可能性のある最善の公共政策体系の中で用いられることを望んでいます。しかし、被援助国政府に干渉したり、意見を押し付けたいと思ったことはありません。戦略的行動計画は、成功と失敗から学び続けることに基づいて、政策を進化させる方法を提供します。

最後に、国連憲章は1945年6月26日に多くの国々によって調印され、国連は1945年10月24日に発足しました。従って、1995年には、国連が世界の平和と安全保障に貢献してきて、まる50年になります。国連は民主的価値と人権の尊厳を世界のほとんどの地域に広める手助けをしてきましたが、世界の多くの地域でいまだに、食べ物と飲み水に対する人間の基本的要求は満たされていません。従って、2000年までに飢餓を終結させようという世界的な決意は、提案されている第50周年記念社会開発サミットの重要な成果として期待されています。

JICAとハンガー・プロジェクトが先頭に立った、本日の世界的なパートナーシップは、1995年の国連サミットに参加する世界の指導者たちに、最も古く、しつこい人類の敵である飢餓が、いかにして2000年までに過去の問題と化すことができるかを証明できるでしょう。これが、21世紀の新しい地球に対して日本が行う最も重要な貢献の一つとなるはずです。

質疑応答

司会（河西）：スワミナーサン博士ありがとうございました。世界から飢餓問題をなくすためには、食糧増産だけでなく所得配分についても考えなくてはなりません。様々な角度からこの問題にとり組む必要があります。博士はまた、飢餓問題にとり組むために我々に何ができるか、ということについて話もされました。そして、多くの事例を引かれて、博士の論点を大変はっきりと示して下さいました。それではもうすでに時間も過ぎましたけれども、2、3、ご質問がございましたら、お受けしたいと思います。

平野：ハンガー•プロジェクトのボランティアの平野と言います。1995年のワールド•サミットについてですが、詳しく説明していただけないかと思いまして。実際、予定されているのでしょうか、そしてハンガー•プロジェクトが団体として協力するのでしょうか。そうだとしたら、これはすばらしいと言うか、すごいことだと思うんです。

スワミナーサン：私が知っている限りでは、国連安全保障理事会は、国連発足50周年の1995年に、国連サミットを開催する決定をしました。また、社会、人類の発達に関する問題を取り扱う方がよいという、決定も行いました。そういった会議やそのやり方についての詳細事項は、総会の決議で明らかになるでしょう。その決議は現在の総会期間中に出されるかもしれないとのことです。飢餓と社会的発展の問題に没頭するハンガー•プロジェクトに関しては、ホームズさんにお話しいただいた方がよいと思います。それはきっと他とのパートナーシップをもって最善を尽くしていくことでしょう。

ギザウ：エチオピア大使館のものです。ホームズさんに質問です。先程レクチャーでおっしゃいましたように、多くのアフリカの優れた指導者や草の根レベルの人々がハンガー•プロジェクトのアフリカ賞を受賞しているとのことですが、私の理解が正しければ、それにはかなりの賞金が出されていると思うのです。つまり、象徴的な賞の他に10万ドルを提供しておられますけれど、世界的な飢餓終結に取り組んでいる団体としては、大金ではないかと思います。これには何かある種の目的をもっておられるはずです。この賞を導入するにあたって、何か目的があったはずですが、そ

れは達成できましたか。10万ドルを提供することによって、何を達成したかったのですか。10万ドルを飢えた人々に提供すれば、多くの命を救えたかもしれません。しかし、優れた指導者や草の根レベルで飢餓終結のために尽くしてくれた人々に10万ドルを提供する場合、目的があるはずです。その目的は果たせましたか。どの程度の成功を収めたのでしょうか。以上が私の質問です。

ホームズ：ご質問、ありがとうございます。私達は目的の達成過程の途中におります。なぜ賞金を10万ドルにしたかお話しします。私達もそれは大金だと思っています。この賞が注目に値するものだということで、世界のマスコミの関心を引くために、大金であることを選んだのです。これ以上低い金額で注目されるとは思いません。賞金の金額が大きいということだけで、初めからメディアの注目が集まりました。私達は、アフリカの指導者たちが国民の福利の為に働いていること、アフリカが再び自立に向かって動いていることに、世界の関心を引きたかったのです。これが賞金を高額にした理由のひとつです。

そのもう一つの理由は、この指導者たちの大胆さ、勇気、革新的発想、創造性に見合った金額にしたかったからです。アフリカの指導者の勇気に匹敵させたかったのです。

賞金について知っておくべき第三の点は、受賞者は皆、アフリカ国民の福利に賞金を投資しているということです。デューク大統領もそういった指導者の一人で、その年の受賞者が二人いたので、賞金を折半し、受け取った5万ドルをセネガルの農民に毎年送られる賞に投じました。そうして、その5万ドルは、肥料を農業生産性を高めるような方法で使用するセネガルの農民に毎年送られる賞に投資されたわけです。ジンバブエのムガベ大統領は、農業学校に行かせてもらう余裕のない、貧しい家庭の子供たちのために奨学金をつくりました。受賞したお金で奨学金をつくって頂いたお陰で、今でも貧しい家庭の子供達は農業学校に通っており、それによって農業の生産性が高まり、家族の寿命も延びるわけです。サンバ先生とお話ししていましたところ、先生は今年の受賞者の一人ですが、アフリカのサヘル地域で企業家を見いだすための財団を設立するつもりだそうです。5000ドル貸すことで地域社会全体の生活を向上させることができますし、お金さえあれば、学校でも診療所でも何でも建てることができます。ですから、賞金を受け取った人々は、ただ食糧を与えるというよりも、もっと有効な方法で、賞金をアフリカの人々に投資しているのです。

賞金を高額にしたのはこういった理由からです。私は、この賞の目的が認識され始めているように思います。この賞はアフリカの政策を揺るがしつつあると思います。人々はアフリカの福利に注目し、指導者がそれをよく認識した上で何を行い、他の指導者たちがそれと競り合うのを見ています。ガーナのエスタ•オクルさんが受賞した時のことです。彼女は、女性としての初めての受賞者でした。手紙が何通もきて、これまでこんなに有名になったことはないと、おっしゃっていました。至るところで講演に招待されますし、会議にも出ます。彼女に続いて、女性はいかに企業人となるかを学びつつあります。受賞者の一人であるトーマス•オディアムボさんは、アフリカの一層の科学的発展のために、賞金の一部を使っています。ですから、私達は政策に影響を与え、アフリカだけでなく世界中に、役割モデルを作り出す過程にあると感じますが、アフリカの指導者のアフリカに再び自立と自給をもたらしたいという意志を示すために、アフリカにスポットライトを当てております。ですから、今年で賞をなくしたくありません。毎年続いていってほしいと思っています。私達はこの賞の実績に大変満足しています。そういえば、オバサンジョ将軍も財団を設立されました。お名前をあげていない受賞者の方には申し訳無く思います。受賞者全員がアフリカの人々に賞金を投資してくださったからです。皆さんの名前をあげることができませんでしたが、皆さんが投資してくださったのです。

司会： ありがとうございました。

本日のセミナーにつきましては、これをもちまして終了とさせていただきたいと思いますが、最後に司会の立場といたしまして、まとめをさせていただこうと思います。

最初から拝聴いたしておりました限りにおきましては、まず今日の世界の危機的状況の中でハンガー•プロジェクトが目指されるところ、そのさまざまな活動と、その原動力となる各種の調査、研究、加えて教育、情報の提供等を通じまして、個人個人のハンガーに対する認識を改めせしめるような形で、参加者と同時に賛同者の確保に努めておられるというふうに理解ができたと思います。

本日の講師でいらっしゃるハンガー•プロジェクトの皆様方の言にしたがいますと、JICA も含めまして、日本その他、各分野での活躍を行っている各種の機関との協力関係がたいへん重要なのだというふうに思われます。

皆様方が、私どもも含めまして、ODA と NGO の連携についても、今後の大きな課題であるというような認識をされているところだと思います。

日本側の講師でいらっしゃる友松先生の事例の中で述べられましたごとく、個々人の自助努力を助長するという日本的なアプローチ、これもたいへん大切であろうと思います。同時に、こうしたアプローチが現在、農村開発の問題、人口の問題、プライマリー・ヘルス・ケアの問題、WIDの問題、そういった問題へのアプローチとして日本も捉えているところでございまして、このようなアプローチの仕方は本日、お話をうかがった限りにおいて、ハンガー・プロジェクトのお考えと共通するところが多々あるものと承知をいたします。

本日は講師の方のたいへんご熱心な熱のこもったレクチャーズをうかがわせていただきましたが、同時に聴衆の皆様からもたいへん有益で、前向きなコメントもちょうだいいたしましたし、また飢餓の問題を真剣に考えておられる皆様方からの真摯な質問も承ったということで、飢餓についての今後の取り組み方について、ここに出席した全員がおおいに勇気づけられたところであると思っております。

最後に、私の個人的印象をほんの1、2分申し上げさせていただきますと、何よりもホームズ理事長の、飢餓は終結できるという強い確信に満ちたご発言が、きっと今後、世界を動かす原動力の1つになるでありましょうし、また全員にとってこれは大きな希望であろうかと思います。

以上の通りでございますが、本日はたいへん熱心な参加者の皆様と、同時にたいへん熱心な講師の皆様との、会場の中での、日本語で言いますと、一体感、これを感じましたことが何よりの収穫ではなかったかと、私は思っております。

司会者の不慣れなところで、かなり時間をとりまして恐縮でございましたが、最初に少し心配をいたしたのですが、日本では新幹線(ブリット・トレイン)が1時間以上遅れますと、鉄道会社は特急代金を返さなければなりません。30分で終わりましたので、JICAはこれをご勘弁いただけることになるかと思いまして、皆様のご協力を、最後にあらためて感謝をいたす次第でございます。たいへんありがとうございました。

資　料

資料 1: セミナー・プログラム
資料 2: 参加者略歴

●資料 1：セミナー・プログラム

14:00　開会

14:05　挨拶
眞木秀郎　国際協力事業団副総裁
桜内義雄　衆議院議長

14:15　「世界の飢餓終結：ハンガープロジェクトの戦略的アプローチ」
ジョーン・ホームズ（ハンガー・プロジェクト世界理事長）

15:00　「アフリカにおけるハンガー・プロジェクトの事業」
フィティグ・タデッセ（ハンガー・プロジェクト・アフリカ部長）

15:20　質疑応答

15:30　休憩

15:50　「開発途上国における食糧生産の向上について」
友松篤信（宇都宮大学農学部助教授）

16:10　質疑応答

16:20　「永続的栄養保障の達成：非凡なる機会」
M.S. スワミナーサン（ハンガー・プロジェクト世界理事）

16:40　質疑応答

17:00　閉会

●資料2：講演者プロフィール

ジョーン・ホームズ　Joan Holmes

ハンガー・プロジェクト世界理事長

1977年にハンガー・プロジェクトが発足して以来、世界理事長をつとめる。その他、海外ボランティア援助に関する米国国際開発庁(USAID)諮問委員会委員、インターアクション執行委員会議長、国際開発会議評議委員、海外開発委員会ディレクター等を歴任。

フィティグ・タデッセ　Fitigu Tadesse

ハンガー・プロジェクト、グローバルオフィス、アフリカ部長

エチオピア外務省に勤務し、駐ジブチ大使、駐イタリア大使等を歴任。1998年より現職。

友松篤伸

宇都宮大学農学部助教授

名古屋大学農学部助手を経て、1981年から2年間JICAインドネシア・ボゴール農大農産加工パイロット・プロジェクト専門家として品質管理を担当。1984年1月から1991年4月までJICA国際協力専門員。この間、1986年から2年間、国際食糧政策研究所研究員としてインドネシア・ジャワ島のポスト・ハーベスト・ロスに関する研究を行った他、JICAが行う各種の海外・国内調査に従事。1991年5月より現職。

モンコンブ・サムバシバン・スワミナーサン

Monkombu Sambasivan Swaminathan

長年に亘り、FAO、WHO、国際自然保護連合など12の国際機関に関与する。現在、国際自然保護連合会長、国際マングローブ協会会長もつとめる。1977年のハンガー・プロジェクト発足以来、現職。

JICA